



334

講談社現代新書

上海

近代都市

粋と無頼が匂いたつ街、SHANGHAI.

豪壮な西洋建築が屹立するウォーターフロント空間ウォーターフロント空間＝外灘。

瀟洒なアールデコが華開く、「洋行」世界。

租界を一步外に出れば、中華古来の

迷路空間＝県城や、蘇州河川向こうの

日本人街＝虹口。「魔都」を舞台に列強や

民族がくり広げる、権力と独立への

夢と矛盾。上海をくまなく歩き、

河岸にたたずみ、アジアの近代化の

意味を、もう一度問い直す。

藤原恵洋



Ⅶ 幻想の大上海計画

彼岸の都市へ……	223
虹口の隨者空間……	218
蒋介石の遺産……	212
逆説の「恒産」計画……	208
中国銀行の逆襲……	204
宿命の「民族形式」……	201
大上海都市計画……	199
蒋介石の都市計画……	197
プロバガンダとしての都市……	196

的に難しくない。しかし民族資本家たちが求めたのは、民族のアイデンティティを金融の拠点に与えていくことだった。

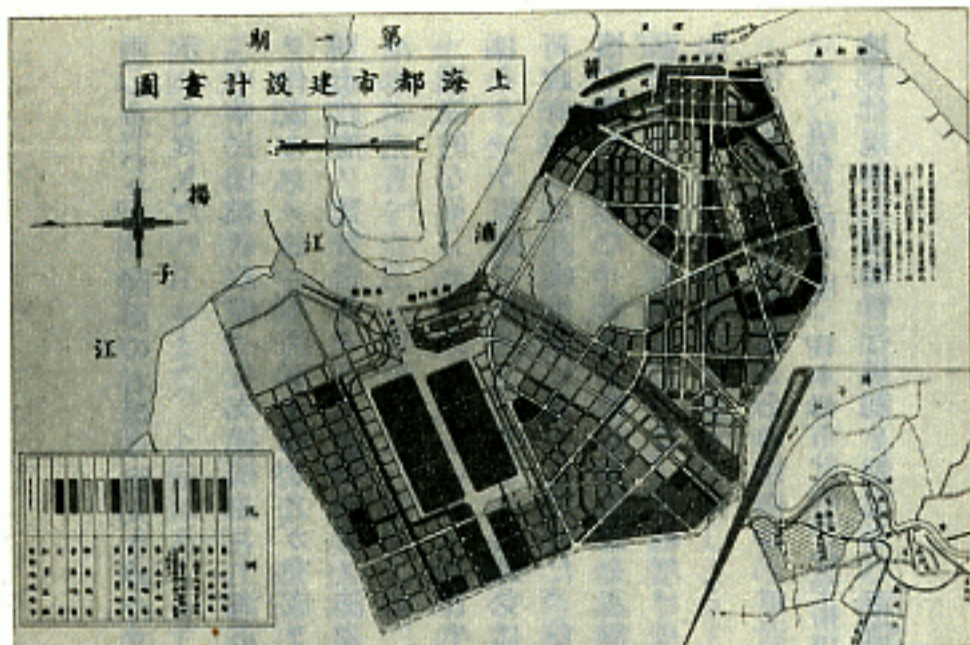
一九三二年(昭和七)には、日本との間に第一次上海事変が起こった。この頃、国民政府時代の中国は新たな民族運動を求めて、さまざま模索を続けた。民族意識が建築や都市空間の表裏に反映された事件として、この建築の登場は大上海計画とともに、重大な意味を伝えているのである。

竣工直後の一九三五年、改組により資本増大をはかる。その内、半ばを国民政府持ち株とし、同年五月の新中央銀行法、同十一月の幣制改革へと急旋回させていった。この時すでに上海は中国資本の拠点でもあった。その数、本店五十三、分支店のみをもつもの二十九。十分な台頭といえたが、こうした上海を襲うように一九三七年(昭和十二年)、日中戦争が勃発。民族の資本家たちは、上海での主導権を得る前に、日本軍の軍靴に蹂躪されることになったのであった。

逆説の「恒産」計画

これに先立ち、一九三二年(昭和七)、はかなくも民族の上海計画は、第一次上海事変をもって幕を閉じる。戦火と資金難が行く手をさえぎった。しかしこの計画に、意外な継承者が現れ

上海都市建設計画図



上海都市建設計画図（上海恒産株式会社による）。

た。上海事変によって侵略を果たした当の日本軍が、中国進出の一環としてこの計画をさらに取り込み、自分たちの計画に変えていったのだ。そしてそこには、国策の名の下に登場した内務省の都市計画技師たちが、日本ではできないような大胆な都市計画技術を試みていた。

むろん彼らが継ごうとしたのは、中国民族のための都市空間の建設ではない。大東亜秩序建設の一環として、大日本帝国の都市を上海北郊に建設しようとしていたのだ。

『第一期 上海都市建設計画図』という計画図は、この具体的な内容を伝えてくれる。図面を作成した「上海恒産株式会社」が、この計画母体であった。図面は鮮やかに色分けされ、現代日本における都市計画のマスタープラン（全体計

画)を思わせる。図面の右端に記入された文章が、この計画のいきさつを端的に語っているの
示しておきたい。

「中華民國維新政府ハ日提携並ニ上海市ノ明朗化ノ為正ニ上海市復興局ニ命シテ本計画図案
ヲ作成セシメ茲ニ本図案ノ通り之ガ完成ヲ見タリ上海恒産株式会社ハ上海市復興局及上海市特
別市政府ノ監督指導ノ下ニ維新政府ノ法律ニ基キ右計画図ニ依リ上海都市建設事業ノ経営ニ当
ルモノナリ」

国際的な第三セクターともいえる半日半中国維新政府のデベロッパ、上海恒産株式会社と
はそういう組織であった。すでに国民党は親日派と抗日派に別れており、日本軍と近かった維
新政府がこの計画母体に含まれていた。むしろこれは軍事侵略に伴った日本側の中国に対する
懐柔策であった。表面で新都市建設を基盤とした経済提携を謳いながら、侵略のきな臭さを隠
蔽しようというものであった。それだけに会社に与えられた「恒産」の名は言い得て妙であっ
た。

恒産会社の成立経緯とその性格は、越沢明氏の研究（「日中戦争時における占領地都市計画につ
いて」昭和五四年度 日本都市計画学会学術研究発表会）に詳しい。それによれば「恒産会社は土
地貸付規則、建築暫行規制を制定し、市街地形成を強力に指導することができた」とされる。

皮肉にも中国民族の都市は、日本軍の傀儡^{わいらい}ともいえた維新政府と恒産会社の指導力のもと、ようやく具現化されていた。

しかし、たとえばこの計画進行中の一九三九年五月に公布された「上海市建築区画暫行条例」は、いったい誰が誰の土地を区画しようとしたのだろうか。ここで示された「用途地域制」は、戦後日本の都市計画理念を支える重要な骨格として建築基準法にも盛り込まれたものである。この時、上海の中の「日本」で、その試行ともいえる適用が行われたのだった。

具体的には住居地区（第一・第二）、商業地区（第一・第二）、そして工業地区（第一・第二）を細かく分け、さらに公共・雑居・倉庫の各地区と公園を加え、理路整然とした地域制を完結させようとしたものであった。しかし雑居の名からもわかるように、この都市はあくまで日本人からの移住者を市民と想定した。雑居とは、日本人が中国人を交じえることをいい、中国人の雑居地区は、都市の一角にささやかな区画を設けたものであった。

中国にあって中国ではない都市。悲運は再び繰り返されようとしていた。これは一九三二年三月一日に建國が宣言された満洲国の都市にも通じる。十九世紀の西洋人から始まり、最後には同じアジアの日本まで、上海はあくまでこれらの侵略者に供される都市空間として求められていった。民族が求めた上海とは、あくまで幻想に過ぎなかった。一九四九年の解放までの上

海が背負った宿命の歴史は、租界のみならず大上海都市計画をも通じ、逆説としての中国の近代を投影していったのだった。

いうならば、上海を培おうとすればするほど、自分たちの生産が搾取され、自分たちの生命が脅かされていくという決定的な逆説が、ここに国家的規模で拡大増幅されていったのである。明治以降の日本にとっての近代が、昨日よりは今日、今日よりは明日が良くなる、というすこやかな直進性を目標に理解されていたのに較べれば、なんと輻輳した近代であったことだろうか。否、むしろ、近代とはこの輻輳した状況の中ではじめて到達しうるものであったかもしれない。中国、そして上海の近代から学ぶことは、こうした点にこそ凝縮されているはずである。

蒋介石の遺産

つわものどもが夢の跡。現在の上海市街を東北へ突き進んだ五角場の複雑なロータリー交差点、このすぐ北側が一九二〇年代末期に計画造営された「大上海都市計画」の中心、「政治区」の跡地である。五角場あたりも当時の計画の中で生まれた放射状道路の名残りである。しかし現在は、新興の郊外住宅地の様子が強く、五十年以上も前の、蒋介石をパトロンに築かれた計